

# 引用分析から見た国文学・国語学研究者の資料利用 Materials Usage by Japanese Literature and Studies in the Japanese Language Researchers: A Citation Analysis of Journal Articles

山西史子\*

*Fumiko Yamanishi*

## Abstract

The purpose of this paper is to clarify the types of documents primarily used for the researches both in the Japanese literature and the studies in the Japanese language by analysing citations of selected research papers. The study in this method needs to be done since some of prior researches show that those fields have been recognized as representatives in the humanities.

First, the author conducted interviews with researchers in the above fields. Through the interviews she could verify the names of academic societies and the titles of scholarly journals which are considered indispensable in the fields. The following two aspects were also lead to be pointed out:

1) A researcher examines whether the material at hand is edited for its scholarly community.

2) S/he tends to trace a particular author who is related to his/her research topics.

The following three journals were selected for the survey based on the above results: *Kokugogaku*; *Kokugokokubun* and *Kokugo to Kokubungaku*. 119 articles published in 1994 and 122 in 1997 were chosen from these titles.

The author examined nine aspects regarding on types of publications, types of documents, and authors of documents through analysis of 1351 citations in 1994 and 1516 in 1997 respectively from the above. The frequency of citations of multiple documents by the same author was also included for the examination.

The statistical results were divided into each field of the Japanese literature and the studies in the Japanese language. The followings were found from the results:

1) The order of frequency for types of cited materials: book; journal/college bulletin; the others. The total percentage of the first and the second types were more than 80%.

2) It was about 20 % in total for a researcher to cite multiple documents by the same author in his/her paper.

It was also clarified that the latest documents were not always most significant for his/her researches. Though, the author of the document cited was the major factor of document citation.

---

\*愛知淑徳大学大学院図書館情報学専攻

## 1. 国文学・国語学研究の特徴

国文学・国語学研究については、それぞれの分野の代表的な二次資料である、国文学年鑑と国語年鑑から概要を知ることが出来る。国文学年鑑によると、国文学は研究対象となる資料の時代により、5つの領域に分けて扱われることが一般的である。また、国語年鑑からは、国語学は、領域を便宜的に分けることはあるが、決定的な分け方は確立していないことが分かる。

国文学・国語学は、大学の組織の中では一つにまとめられる例が多い。実際のところは国文学も国語学も複雑に入り交じっており、文体の研究や書誌学のように、国文学とも国語学とも解釈できる研究もある。

しかし、近年では国語学は科学であることが意識されており [1]、その点から見れば明らかに国文学とは異なっている。これに対して国文学は、伝統芸能と通じあうところがあり、無理をして新たなものを作成するよりは現在までに確認されている研究や作品を伝承する点に力を入れているとも言われている [2]。このように、国文学と国語学の研究は、異なる分野として見ることができよう。

しかし、国文学と国語学は“同一の資料を使う所にその共通性がある” [3] と言われており、情報の利用を考えると、国文学・国語学研究は同時に扱うべきであろう。また、両分野を結びつける研究資料に注目する必要がある。

## 2. 国文学研究者と研究資料

国文学研究と資料に関する研究として、真弓 [4]、倉田ら [5]、倉田 [6] が上げられる。

真弓 [4] はケーススタディと大規模な調査により、国文学研究者が研究発表メディアとしてどのように資料を利用しているかに注目している。結果として、図書よりも雑誌の方が発表年代が若い研究者によく利用されていることなどが明らかにされている。倉田ら [5] は国文

学研究者が情報を生産する際にどのような資料を用いているかについてまとめている。結果としては、図書の生産性が高い研究者は同時に雑誌論文の生産性も高いことなどが明らかにされている。

倉田 [6] は、学術雑誌の機能として、情報の生産に注目して調査を行っている。国文学関連の学術雑誌95誌について、編集機関、原著論文の掲載数、記事内容の構成、査読性の有無について調べた。結果として、対象誌を6グループに分け、その中で商業誌が他の雑誌グループとは異なる性質を持つことを明らかにした。

以上の様に、国文学を対象としている研究では、国文学研究者の研究発表の側面を中心に調査されている。しかし、利用面に注目した研究は少ない。

海外では、Budd [7] がアメリカ文学を対象に、引用分析を行っている。調査結果は、被引用文献の形態（図書・雑誌・新聞など）と種類（一次情報・二次情報）、被引用文献の年令など、被引用文献の物理的な側面に注目してまとめられていた。

本研究は、Budd [7] と同様に被引用文献の形態や種類について調べ、被引用文献の利用を決定づける要因について、明らかにすることを目的としている。

引用分析は、客観的なデータが収集出来る点に特徴がある。

研究者がどのような論文や本を読んでいるのか調査することは困難である。しかし、利用者であり生産者である研究者は、使用した文献の書誌事項を自分が発表する雑誌論文や図書の中に引用文献として記載しているために、この引用文献を使って研究者の間の情報伝達、影響関係を調べる研究がなされてきた。クレーンらの社会学研究者も社会調査と引用調査を併用して、研究領域の中の情報伝達を分析している。研究者個人の間での直接的な接触は時間と地域の制

約を受けるが、引用による情報伝達はこうした制約を受けないという大きな特色がある。[8]

ここで述べられているように、引用分析は、時間と空間の制約を受けない情報伝達を調査するのに適していることが分かる。人文科学では一般に、古い資料の重要性が述べられているように [9]、研究者個人間の接触は不可能でも資料は利用されている可能性が高い。

### 3. 国文学・国語学分野を対象とした引用分析

#### 3. 1 予備調査

具体的な調査対象や調査項目の設定のために、国文学・国語学それぞれ2名の研究者に資料利用を中心としたインタビューを行い、以下の3点を確認した。

- (1) 研究の際に重要となる学会名や学術雑誌の名称。
- (2) 研究のための情報源としては、図書と雑誌・紀要が中心である。また、それらを利用する際には、その資料が一般向けに書かれたものであるのか、研究者向けに書かれたのかを区別していること。
- (3) 自分のテーマに特に近い研究を行っている研究者が執筆している場合には、それが一般向けに書かれた資料であっても利用し、必要ならば引用も行うこと。

#### 3. 2 調査対象

インタビューでも確認されたように、国文学・国語学研究の主要な資料は、図書、雑誌・紀要である。これらの資料の利用面に注目して、引用文献の分析を行うために、引用方法や表記がある程度整っている雑誌の掲載論文を対象とすることにした。

しかし一口に雑誌と言っても倉田 [6] によると、国文学研究資料館所蔵のものだけでも約

1000種も存在している。また、人文・社会科学分野の「学術雑誌」は欧米の自然科学を念頭に置いた条件とは明らかに異なっていることも指摘されている。

その中から調査対象を選定するにあたっては、先にインタビューした研究者の意見により、國語學、國語國文、國語と國文學の3誌を対象として、それらに掲載された論文中に引用されていた文献を分析することにした。

この3誌はいずれも森岡 [10] の定義する学術雑誌条件とほぼ合致しており、調査対象として適切であると言えよう。

また、調査対象の期間は、各々の雑誌を調査した結果、年度単位で編集委員の異動等が行われている。この点を考慮して、最新の結果を出すために1997年度の1年間に対象誌に掲載された論文を調査対象とした。さらに、最新の傾向と比較する為に、1994年度についても調査対象とした。また、調査対象誌に掲載されたものでも論文ではないものは調査対象から除外した。結果として調査対象となった論文数は表1のとおりである。

表1 調査対象雑誌と論文数

雑誌名	対象論文数	
	94年度	97年度
<u>國語學</u>	21件	18件
<u>國語國文</u>	34件	35件
<u>國語と國文學</u>	64件	69件
計	119件	122件

また、調査対象論文を国文学と国語学に分類したものを表2に示した。なお、その他(縦断的)とは、国文学と国語学の両方の分野に関わる内容の論文のことである。

表2 調査対象論文の分野別件数

分野	94年度	97年度	計
国文学	75件	89件	164件
国語学	44件	32件	76件
その他(縦断的)	0件	1件	1件
計	119件	122件	241件

### 3. 3 調査項目

データの収集を行う項目に関しては、Budd [7] に従った。まず被引用資料の物理的な形態や種類に関わる項目を設定した。加えて、先のインタビューで指摘された、被引用文献の著者についても項目を設定した。調査項目は以下の9項目である。

各項目について、具体的に説明して行く。

#### A 被引用文献の物理的な形態

##### A-1 被引用文献の形態

図書、雑誌・紀要、口頭発表、その他（不明）とした。図書、雑誌・紀要に関しては判断が難しい場合はNACSIS-CAT等で確認をした。雑誌と紀要の区別に関しては以下の様に判断が難しい例もあった。従って、雑誌か紀要かの判断はせずに、「雑誌・紀要」としてまとめた。

玉藻（フェリス女学院大学国文学会）

叙説（奈良女子大学国語国文学研究室）

また、「口頭発表」には、発表そのものからの引用と、配布資料（要旨集）からの引用を含んでいる。

#### B 被引用文献の種類

##### B-1 自誌引用かどうか

調査対象論文の掲載誌と同一誌からの引用の場合のみ集計した。

##### B-2 被引用文献が調査対象3誌かどうか

被引用文献が、調査対象の3誌の例の中で、自誌ではない、他の2誌からの引用であれば集計した。

B-1とB-2を分けた理由は、國語學には、国語学関連の論文しか掲載されないが、國語國文、國語と國文學には、国文学・国語学両方の論文が掲載されており、3誌をまとめて被引用データを集計すると國語學の数値だけが低くなる可能性が高いからである。

##### B-3 被引用文献が商業3誌かどうか

倉田[6]によれば記事内容の面で、解釈と鑑

賞、國文學、文学の商業3誌は、他の学術雑誌とは異なった傾向を表している。従って、これらの雑誌の利用が他の雑誌の利用とは異なる可能性があるため、別に集計する。

##### B-4 被引用文献が記念論文集かどうか

倉田ら [5] の指摘する、所属の違いによる図書の生産性への影響を考慮して設けた項目である。図書の中でも執筆の機会が限定される例である。ただし、記念論文集という題は角書のみの場合が多く、被引用文献の記述には漏れも予測された。

##### B-5 被引用文献が外国語文献かどうか

国文学・国語学はほとんど国内のみで研究・発表が行われてきた。しかし近年海外で研究が行われ日本語以外で研究発表が行われることもある。また、学際的な研究の為に外国語の文献を参考にすることも想定した。ハンゲルや中国語の資料は、漢字で題名が付けられると日本語の文献と区別が難しい場合もある。ここでは調査の上、明らかに外国語の資料であると判断出来ない場合は日本語の資料として扱った。

#### C 被引用文献の著者について

##### C-1 自己引用かどうか

被引用文献の著者名に、調査対象論文の著者が含まれている場合を自己引用とした。この項目はC-2の同一著者からの複数文献の引用と関連している。自分を含めて特定の研究者による文献をよく利用するのではないか、という予測に基づいている。被引用文献が共著の場合はそのうちの一人が調査対象論文の著者であれば、自己引用とした。

##### C-2 同一著者の複数文献の引用かどうか

この項目は、研究者が自分の研究と関連のある特定の研究者に注目していることを確認するために設けた。調査対象の一論文の中で、自己引用以外のデータを使って集計した。集計の仕方は、一論文の中で特定の研究者の著作を何件引用しているかである。つまり、一論文の中に特定の研究者の別個の著作を2件引用していれば

ば2回、3件ならば3回という数え方である。

#### D その他

##### D-1 発表年または出版年

調査対象に記述がある場合のみ集計した。多巻物など複数年にまたがる記述の場合は、完成年を集計した。また、改訂版などで複数の出版年の記述がある場合も改訂年を出版年とした。

なお、いずれの項目に関しても、記載の漏れや誤りの可能性があっても、データの補正は行っていない。

### 3. 4 引用分析の手法と条件

被引用文献の中には、研究対象である作品類と、研究文献のデータが混在することになるが、作品類は引用分析の対象から除外した。その理由として、研究者にとって研究対象とする作品に対する意識は“われわれは、一冊の本、一人の作家、一つの時代、というように極めて限定された分野を一生読み続けるのを仕事にしている”[11]とまで言われており、通常の研究論文と同様の探索・検索を行うとは考えられないからである。したがって、本調査の目的である資料の利用という観点には合わないと考え、データとして収集しないことにした。

結果として、以下の3点の条件を満たす被引用文献を分析の対象とした。

- (1) 被引用文献の資料名が明記されている
- (2) 被引用文献の著者が明記されている
- (3) 被引用文献が先行研究として、扱われている。

しかし、データの中には、被引用文献が先行研究であるのか、作品であるのかの区別が困難な例も存在した。また、作品本文と解説が同一の図書に収録されている例も存在した。

前者については、(3)に基づき、被引用文献が先行研究として扱われていれば調査対象とした。また、後者については、本文の引用については分析対象外だが、解説の引用については

分析対象とした。

## 4. 調査結果

調査対象論文中に引用されていた文献は、94年度が1351件、97年度が1516件であった。以下、それぞれのデータについて結果をまとめてゆく。

なお、3章で述べた調査対象論文の中で、その他(縦断的研究)とした論文には、いずれも、調査対象となる被引用文献が無かったため、これ以降のデータには含まれていない。

### 4. 1 被引用文献の形態

結果を表3に示した。いずれの項目でも、被引用資料の各形態が占める割合は、図書、雑誌・紀要、その他(不明)、口頭発表の順で多かった。特に図書と雑誌・紀要で94年度は89.1%、97年度は96.2%を占めている。また、国語学よりは国文学の方が図書の比率が多く、雑誌はその逆の傾向を表している。また、国語学では、資料の種類が判断できない不明の分類が多くなっている。両年を比較すると、いずれも97年度で図書の割合が増加している。また、その他(不明)と区分せざるを得なかった件数が97年度は国語学を中心に大幅に減少している。

### 4. 2 被引用文献の種類

結果を表4に示した。

#### ① 自誌引用かどうか

94年度は69件(5.1%)、97年度は59件(3.8%)であった。いずれも注目しなければならない件数であるとは考えにくい。

#### ② 被引用文献が調査対象3誌かどうか

94年度は100件(7.4%)、97年度は97件(6.4%)であった。この数を自誌引用と合計すると、それぞれ169件(12.5%)、156件(10.3%)となる。

表 3 被引用文献の形態

調査項目		総引用	形態			
分野			雑誌・紀要	図書	口頭発表	その他(不明)
国文学 (小計)	94年度 (75件)	757 10.1	311(41.1%) 4.12	405(53.5%) 5.40	0 0	41 0.55
	件数					
	平均件数					
	97年度 (89件)	1057 11.9	432(40.9%) 4.90	594(56.2%) 6.70	7 0.08	24 0.27
件数						
平均件数						
国語学 (小計)	94年度 (44件)	594 13.5	205(34.5%) 4.66	282(47.5%) 6.40	7 0.16	100 2.27
	件数					
	平均件数					
	97年度 (32件)	459 14.3	184(40.1%) 5.75	249(54.2%) 7.80	7 0.20	19 0.60
件数						
平均件数						
合計	94年度 (119件)	1351 11.4	516(38.2%) 4.34	687(50.9%) 5.77	7 0.06	141 1.18
	件数					
	平均件数					
	97年度 (121件)	1516 12.5	616(40.6%) 5.10	843(55.6%) 6.97	14 0.12	43 0.36
件数						
平均件数						

③ 被引用文献が商業3誌かどうか  
94年度は39件 (2.9%), 97年度は23件 (1.5%)であった。

④ 被引用文献が記念論文集かどうか  
94年度は16件 (1.2%), 97年度は15件 (1.0%)であった。この資料は図書の中でも特に執

筆の機会が限られるものである。そのため、内容の信頼性は高いはずだが、思ったほどは引用されていなかった。

⑤ 被引用文献が外国語文献かどうか  
94年度は43件 (3.2%), 97年度は21件 (1.4%)であった。この資料に関しては、国語学で

表 4 被引用文献の種類

調査項目		総引用	種類				
分野			自誌引用	対象誌	商業3誌	記念論文集	外国語文献
国文学 (小計)	94年度 (75件)	757 10.1	36	49 0.65	29	6	1
	件数						
	平均件数						
	97年度 (89件)	1057 11.9	35	49 0.55	20	6	2
件数							
平均件数							
国語学 (小計)	94年度 (44件)	594 13.5	33	51 1.16	10	10	42
	件数						
	平均件数						
	97年度 (32件)	459 14.3	24	48 1.50	3	9	19
件数							
平均件数							
合計	94年度 (119件)	1351 11.4	69	100 0.84	39	16	43
	件数						
	平均件数						
	97年度 (121件)	1516 12.5	59	97 0.80	23	15	21
件数							
平均件数							

表5 被引用文献の著者

調査項目 分野		総引用	自己引用	同一著者の複数文献の引用				
				2回	3回	4回	5回	6回
国文学 (小計)	94年度 (75件) 件数 平均件数	757 10.1	69 0.92	45	9	3	0	1
	97年度 (89件) 件数 平均件数	1057 11.9	136 1.53	64	18	5	0	0
国語学 (小計)	94年度 (44件) 件数 平均件数	594 13.5	65 1.48	45	10	3	0	0
	97年度 (32件) 件数 平均件数	459 14.3	48 1.50	39	14	4	0	0
合計	94年度 (119件) 件数 平均件数	1351 11.4	134 1.13	90	19	6	0	1
	97年度 (121件) 件数 平均件数	1516 12.5	184 1.52	103	32	9	0	0

の引用が多い点が目に付く。

#### 4. 3 被引用文献の著者

結果は、表5に示した。

##### ① 自己引用かどうか

94年度は134件(9.9%)、97年度は184件(12.1%)であった。これらは両年共に総件数の10%前後を占めている。しかし、自分の過去の著作の探索は一般の研究情報の探索と同一であるとは考えにくい。また、引用行動も自身の研究の宣伝とも考えられる為、この件数はいずれも集計から排除した。

##### ② 同一著者の複数文献の引用かどうか

一論文中に最高6件の同一研究者からの引用が見られた。2・3・4・6回引用が見られたそれぞれの件数を合計すると、94年度で267件(約20%)、97年度では338件(25%)となる。

#### 4. 4 被引用文献の年令

両年度のデータをそれぞれ国文学と国語学に分け図1に表した。いずれのデータでも引用の減少の曲線は緩やかで古い資料も引用されていることが分かった。

#### 5. 国文学・国語学研究者の引用する資料の特徴

##### 5. 1 図書と雑誌論文の利用

表3からは、全データの80%以上が、図書、雑誌・紀要という典型的な紙による資料の利用であることがわかる。図書・雑誌の比率については、表3に見られる様に、図書が最も大きい割合を占めており、明らかに自然科学の学問とは異なった傾向を表している[12]。また、94年度と97年度を比較すると、図書の利用の割合が増加している。この点については、次の節で述べる多様な資料の利用傾向と矛盾するようにも見えるが、図書と雑誌・紀要という典型的な紙メディアの中では、速報性よりは安定性をより重視していると解釈できる。今回の研究では、雑誌・紀要についてより細かい分類をしなかったが、さらに研究を進めるならば、学術雑誌の中でも、国文学・国語学全体を対象としている雑誌と、特定の領域を対象としている雑誌などの区別が必要になるであろう。

##### 5. 2 多様な資料の利用傾向

表4からは、いずれの種類資料に関しても

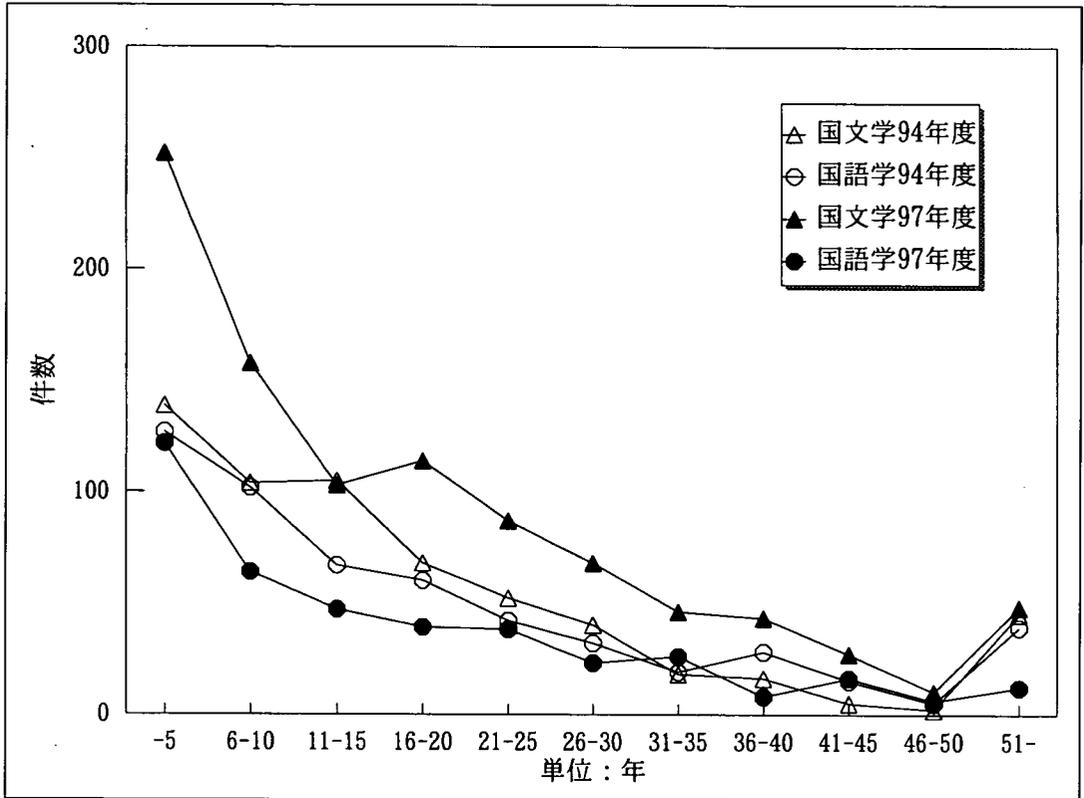


図1 被引用文献の年齢

94年度と97年度を比較すると件数が減少していることが分かる。これは研究者の多様な資料利用の傾向と解釈できる。

個々の結果については、外国語文献の利用について検討してみる。この項目は国文学と国語学によって異なる結果が出ている。94年度も97年度も国文学の論文の中での外国語文献の被引用データはそれぞれ1件、2件で、残りは全て国語学の論文による引用である。現在、国文学・国語学研究において外国語の文献の利用は必須とは言えない。しかし、「国語学」は「日本語学」と名前を変えようとする意見があるほど[13]「世界の中の日本語」を意識している。その流れの中では外国語で発表された文献であっても自分の研究に関係があれば目を通すことが要求されているのではないだろうか。また、94年度は、引用された43件の外国語文献は全て英語であった。しかし97年度は21件の中に中国語・

ハンガルの文献も含まれており、こちらも今後注意すべき点である。

### 5. 3 特定研究者の文献に対する利用

表3に示されるように、調査対象が引用している文献数の平均は、国文学と国語学、94年度と97年度で多少の違いがあるが、10件から15件の範囲である。その中に、同一著者の複数文献の引用が認められる。この点について、論文の執筆者にとって、その著者は特別な存在であると解釈できないだろうか。一論文の中同一著者の複数文献の引用は、94年度116パターン267件(全体の約20%)、97年度では144パターン338件(全体の25%)のデータが同一著者の複数文献の利用によるものであった。この結果は、国文学・国語学研究者にとって、資料の利用や引用を決定づける特定の著者(研究者)が存在する、

と解釈できる。

#### 5. 4 古い資料の利用

結果は図1に示したとおりであり、古い資料も使われていることが分かる。この項目は、発表年や出版年の記述が無い引用が存在したため、全ての件数を足しても総引用数とは合致しない。この記述の有無は調査対象論文の著者の考え方によると思われる、一論文の中で記述の有無が混ざっている例は無かった。また、本居宣長や鈴木胤などの明治以前に発表された研究については発表年を明記することは困難であることも影響を与えていると思われる。さらに、被引用資料が掲載されている図書館の復刻や再版を考えるとますます複雑になってくる。しかし、特定の領域や時代の出版物だけが出版年の記述が無いとは考えにくい。したがって、このデータは全体の平均値と解釈して問題ないと思われる。

以上を統合すると、研究者の資料利用を左右する最大の要因は、資料の著者であると思われる。自分と類似の研究をしている人物は特定されており、自分にとってのキーパーソンとして認知されているのだろう。そして、資料利用の際には、キーパーソンが執筆した資料を積極的に利用しているものと思われる。

#### 6. 引用記述の不統一の問題と二次資料の必要性

5章では、国文学・国語学研究において資料の利用を決定づける最大の要因は著者であることを述べた。

では、被引用文献の書誌事項を論文に記述する際に著者はどう扱われているのだろうか。実際に調査対象となった被引用データの具体的な記述について考えてみる。最初に被引用資料の書誌事項を記入する位置について述べる。94年度のデータでは全く統一性が見られなかった。文末にまとめてある例、論文の節ごとにまとめ

てある例、全て文中に織り込んである例などバラバラであった。しかし、97年度では、引用文献を記入する位置は文末で統一されていた。

次にデータの記述内容について、検討する。まず、被引用資料の著者についての記述は、研究者が重要視していることを裏付けるように、全体を通して、正確な記述がなされていた。国文学・国語学には科学技術情報流通技術基準(SIST)の様な、引用文献の書き方のガイドラインは無い。従って、書誌事項の書き方は個々の研究者に任されているにもかかわらず、著者から書き始められているデータが多かったのも事実である。

続いて資料名や論文名の書き方に検討を加える。こちらも副題の書き方の違いなどがあるものの、比較的明瞭に書かれていた。

一方で、発表年・出版年のデータの有無は論文により、全く異なっていた。また、被引用文献が図書なのか逐次刊行物なのかがデータからは判断に迷う例が相当数あった。こちらも、SISTの様な明確なガイドラインが無いことが最大の理由であると思われる。

この様に、被引用データの記述が一定していない原因は2点考えられる。一点目は調査対象雑誌の投稿規定の中に引用文献の記述についての規定が無いことである。二点目は研究者間に暗黙の了解の部分があり、特に著名な研究書や論文については書誌事項を書く必要は無いという考え方があることである。

さらに問題になるのが、国文学・国語学の(電子的な)二次資料の脆弱さである。国文学・国語学研究の境界線が見えにくいことは、既に指摘した。また、調査結果からも、数値上明らかな違いは見いだせなかった。また、国文学・国語学の資料利用の共通性については既に指摘されている。[3]

ここから考えられるのは、両分野で利用可能な二次資料を作成すれば、その二次資料は積極的に利用される可能性が高い、ということである。新倉 [14] によると、過去の人文科学研究

者の資料利用に対する研究からは、二次資料を積極的に利用しないという結果も出ている。しかし、新倉自身のインタビューによる調査では、二次資料をあまり利用しない、と回答したのは1名だけである。

したがって、適切な二次資料の提供が行われれば、積極的に利用されると思われる。具体的な二次資料の検討については今後の課題としたい。

### 謝 辞

本稿をまとめるにあたって、ご親切な指導をいただいた菅野育子先生に感謝の意を表します。

### 引用文献・注

- [1] 国語学会編. 国語学の五十年. 東京, 武蔵野書院, 1995, 639p.
- [2] 日下力. 論文とレポートの常識Q & A. 國文學: 解釈と教材の研究. vol.38, no.7, 1993, p.112-129.
- [3] 福島邦道. 国語学要論. 東京, 笠間書院, 1973, 165p.
- [4] 真弓育子. 国文学研究における発表メディアの特徴. Library and Information Science. no.23, 1985, p.165-178.
- [5] 倉田敬子; 真弓育子. 国文学研究者の生産性と発表メディア. Library and Information Science. no.24, 1986, p.133-144.
- [6] 倉田敬子. 研究発表メディアとしての日本の学術雑誌. Library and Information Science. no.25, 1987, p.81-92.
- [7] Budd, John. Characteristics of Written Scholarship in American Literature: A Citation Study. Library and Information Science Research. vol.8, no.2, 1986, p.189-211.
- [8] 上田修一; 倉田敬子. 情報の発生と伝達. 東京, 勁草書房, 1992, 229p.
- [9] 岡澤和世. 人文科学者の情報要求と利用. Library and Information Science. no.21, 1983, p.29-48.
- [10] 森岡倫子. ささまざまな属性からみた学術雑誌の定義. Library and Information Science. no.31, 1993, p.51-73.
- [11] 岩下紀之. 図書館情報学科への期待. 愛知淑徳大学論集. no.15, 1990, p.15-31.
- [12] 斎藤憲一郎ほか. 引用文献からみた理工学分野における文献利用の特徴. Library and Information Science. no.23, 1985, p.125-135.
- [13] 徳川宗賢. 「学会運営についてのアンケート」(於山形大会)の集計概要報告. 国語学. no.192, 1998, p.131-133.
- [14] 新倉利江子. 大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性. Library and Information Science. no.28, 1990, p.61-80.
- [15] 宮島達夫. 「国語国文学科」と「日本語日本文学科」. 日本語論. vol.2, no.6, 1994, p.44-45.

### [注]

本論文において、分野名に関して日本文学・日本語学ではなく、国文学・国語学の呼称を採用した理由について述べておく。宮島 [15] によれば学科の呼称では国文学と日本文学は前者の方が多くその差はほとんど無い。また、1997年「国語学会」が実施したアンケートでは「日本語学会」への名称変更を求める意見も多いとされている [13]。しかし、日本文学・日本語学は、海外における研究や日本語教育を意識させる場合も多い。したがって、ここではそれぞれを後者に統一した。